

家族の代理意思決定で Bridge to decision となった重症心不全患者に伴う 全人的苦痛の様相

国立研究開発法人国立循環器病研究センター看護部

小谷 彩乃, 齋藤 信介

Ayano KOTANI, Shinsuke SAITO

1. 目的・方法

近年、補助人工心臓 (ventricular assist device, VAD) 治療は移植待機のみならず Destination Therapy (DT) としても位置付けられ、治療過程における全人的苦痛への支援が重視されている。急性重症心不全においては、患者自身が意思決定に関与できず、家族の代理意思決定のもとで体外式 VAD 装着が行われる場合がある。本研究は、家族の代理意思決定により VAD 装着に至った重症心不全患者における、初回病状説明時から ADL (activities of daily living) 拡大期までの全人的苦痛の様相を明らかにし、看護支援への示唆を得ることを目的とした。

対象は、家族の代理意思決定により VAD 装着となり、研究協力への同意が得られた成人3名とした。方法は、全人的苦痛の評価尺度である IPOS (Integrated Palliative care Outcome Scale)¹⁾ を用いた質問紙調査を、初回病状説明時 (I 期)、1週間後 (II 期)、ADL 拡大期 (III 期) に実施した。加えて、III 期のみ半構造的面接を行い、I 期から II 期は回想的に回答を得た。得られたデータは質的記述的に分析し、時期ごとの全人的苦痛の特徴を抽出した。

2. 結果

IPOS の評価値は、I 期 98 点、II 期 70 点、III 期 74 点であった。身体的苦痛に関する評価値は、I 期 59 点、II 期 40 点、III 期 39 点であり、時間経過とともに低下傾向を示した。一方、精神的苦痛に関する評価値は、I 期 39 点、II 期 30 点、III 期 35 点であり、III 期に再上昇を示した。逐語録からは、51 コード、13 サブカテゴリー、9 カテゴリーが抽出された。I 期は【自立性が脅かされ戸惑い苦悩する】、【未来への不確かさからいつも心が休まらない】、【恐怖や孤独感が死の

イメージを助長する】、【苦痛や苦悩を乗り越えるために1人で対処を模索する】であった。II 期は【支援者との関係性を構築しその者からの支えにより自己を保とうとする】、【苦痛と苦悩が重なり支援者への信頼が揺れ動く】であった。III 期は【治療の前進を喜びつつステップアップにおいて再度生じる苦痛を想起し戻込みする】、【長期にわたる移植医療を乗り越えるため信頼できる医療者と関係性を築く】、【病気をきっかけに家族へのありがたみを感じその関係性の中で自己のあり方を内省する】であった。

3. まとめ・独創性

身体機能の回復が進む一方で、III 期では治療の前進とともに過去の治療体験が想起され、再び生じる苦痛への予期不安から精神的・存在的苦痛の再上昇が示された。本研究における全人的苦痛の様相は、混乱の中で常に付きまとう死や不確かな未来への不安、恐怖への対処方法を模索しながら、支援者との関係性の中で新たな生きがいを探り続けるものであった。看護支援においては、戻込みしつつ進まざるを得ない辛さへの共感をもって接する精神的ケア、機械を含む新しい心臓を得て生き続けることの意味を見出す希望へのケアの実践が求められる。

家族の代理意思決定により VAD 装着となった重症心不全患者に着目し、Bridge to decision における全人的苦痛を、定量的かつ質的に、時期的連続性の中で捉えた点に独創性がある。ADL 改善にもかかわらず持続する心理的・存在的苦痛を可視化し、人工臓器治療特有の看護支援の具体化に寄与する。

本稿のすべての著者には規定された COI はないが、本研究は公益財団法人循環器病研究振興財団の研究支援を受けている。

■ 著者連絡先

国立研究開発法人国立循環器病研究センター看護部
(〒564-8565 大阪府吹田市岸部新町 6-1)
E-mail: ayano.8011.kotani@gmail.com

文 献

1) Integrated Palliative Outcome Scale (IPOS). Centre for health Outcome and Evaluation, University of Cambridge. Available from: <https://pos-pal.org/> Accessed 29 Dec 2025